定本

坂口安吾全集

第六巻

宮本

柳田國男全集

第六巻

冬樹社

定本 坂口安吾全集 第六巻

昭和四十五年二月十五日初版 第一刷発行
昭和四十九年七月十五日初版 第五刷発行

著者 坂口安吾
発行者 高橋直良
印刷所 三容堂印刷株式会社
東京都千代田区神田錦町二ノ二
製本所 三和製本株式会社
東京都台東区上野五ー十三ー一
発行所 冬樹社
東京都千代田区神田神保町二の一八
電話東京 (二六四) 〇三四六 (代表)
振替 東京七七五七

乱丁・落丁本はお取りかえいたします (©第10回配本)

0391-01306-5190

定本

坂口安吾全集　第六巻

監修　石川　淳
　　河上徹太郎
　　小林　秀雄
　　獅子　文六

編纂　奥野　健男
　　檀　一雄
　　平野　謙
　　福田　恆存

題字　石川　淳

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第六巻　目　次

信　長　9
神サマを生んだ人々　200
砂丘の幻　215
発掘した美女　233
町内の二天才　249
餅のタタリ　263
目立たない人　273
握った手　291
女剣士　303
曾我の暴れん坊　340
文化祭　351
保久呂天皇　366
左近の怒り　379
花咲ける石　429
お奈良さま　441

真書太閤記 451
裏切り 512
人生案内 546
桂馬の幻想 557
狂人遺書 572
青い絨毯 606
解説 奥野健男 615
ファルスの文学 宇波彰 634
解題 関井光男 646

小

説

VI

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

信　長

美濃の古蝮

信長はふと目がさめた。平手城秀の声をきいたと思ったが、夢かも知れない。別室にまだ起きている人々の物音はきこえるが、人声はきこえない。平手がこの時刻に近くにいるはずもない。

すると、人の足音がちかづいて、フスマがあいた。信長は半身を起こして、射しこんだ光の手もとに声をかけた。

「政秀だな?」

「そうです」

平手は片手に燭をかかげながら、フスマを左右いっぱいに押しひらいて、坐った。

「お目をさましてお待ちでしたか。さて、なんとさとって、お目ざめですかな」

云われて、信長は耳をすました。特に変った物音もきこえない。平手はなぜフスマを全部押しあけたか。真夜中に人をからかう平手ではないが、とかくシツケや教育の好きな男だ。

平手は一段と力をこめて追求した。

「何事もなくて、深夜にお目はさめますまい。なんとさとッてお目ざめですか」

「人は気ままに目がさめるものだ。キサマだけがそうではないのか」

「アハハ。武士がふと目をさまして思うことは戦(いくさ)だけです」

そして、平手は信長を睨みつけて、ささやいた。

「ただ今から、出陣ですぞ。美濃勢と一戦です」

シッケのためでないと分れば、平手の言葉にケレンがあるはずはない。
信長はフトンを蹴って、立上った。
「そうか。来たか。具足をもて」
爽快な戦意。音にきく大敵をのむ気魄。ミジンも怖れがない。その自覚に満足する。これがオレという若大将の本性なのだ。武者ぶるいが走る。彼は叫びつづけた。
「山城のシラガ首は再び美濃の土はふめまい。オレの足が尾張の土にふみにじってやる。だが、いつに変らずすばしこい蝮オヤジだな。美濃勢はどこに来ている。父上の城にとりついたか」
「敵はどこにも来ておりませぬ」
平手の返事は冷めたい。
「尾張勢が美濃の国へ進撃です。大殿はやがて木曾川を越えられるころじゃ。まず、冷飯でも腹いっぱいお食べなされ」
女たちが食膳をささげて現れた。平手はそれを見すてて立去った。
まもなく、太鼓がなりだした。打ちならすのは平手自身であろうか。ホラ貝もなりだした。
信長はまだ空腹を覚えないので、一パイ目を食べかけているところであった。太鼓の音が追ってくる。平手の目だ。声である。それをはじき返して、信長は心に呟いた。
「真夜中に食欲がないのは当り前だ」
そのとき、容易ならぬ不安がわいてきた。敗北。大敗北。——明日、美濃路へかかって見出すのは、全滅している味方の大軍ではあるまいか。血にそまった父の姿かも知れない。
去年にまさる大敗北を、父は承知で、くりかえすのか。なんたる無謀の進撃。
「はやる者は、負ける」
父は全滅するだろう。そして、その復讐がオレの肩にかかるのか、と信長は思った。天文十七年十一月十七日の真夜中である。信長は十五であった。

去年の秋、織田信秀（信長の父）は美濃を攻めて大敗北した。
そのときは尾張一國の織田諸家に援軍をたのみ、オール織田と云うべき空前の大軍を編成して、堂々と美濃へ攻めこんだのである。
稲葉城の周囲の村々を焼きはらい、町口まで取りついたとき夜になったので、陣を構えるために引きかけたところへ、総反撃をくらった。
ナダレのように追い打ちをくらい、防ぐまもない。巻狩りのケモノが取りつめられたように討ち落されて、織田軍の戦死は五千であった。

稲葉城主は齋藤山城入道道三（どうさん）である。坊主の出身だ。坊主は当時の唯一のインテリであるが、道三は坊主の中でも抜群の智恵者で、若年からアッパレ未来の名僧と評判された腹の底の知れないような怪物だった。寺をすてて油売りの行商人となり、やがて美濃の守護職土岐氏の家老長井の家来となったが、長井を殺して代って土岐の家老となり、さらに土岐氏を追いだし愛人をうばい、美濃一國を手中に収めてしまったのである。

主を殺して国を奪ってかっも、微罪の者を牛裂きにかけ、親兄弟に火を焚かせて釜煎りにするような暴君であったから、前代未聞の悪名は鳴りとどろいていたが、会ってみれば、油壷から出て来たような美顔であった。年老いても、端麗な顔は絵の中から抜けたように色白く、一見柔和な微笑すら絶やしたことがない。

彼の悪智恵は兵法によく生かされていた。彼は刀よりも槍を選んだ。その槍は敵の槍よりも長いものでなければならない。鉄砲の伝来を知ると、忽ちそれを主戦兵器に採用した。当時の誰よりも先んじた独創的な兵法だった。

彼が手中に収めた軍兵は「美濃衆」とよばれて天下に勇名高いツワモノたちであった。加うるに悪魔的な兵法あり。彼と隣合せた城主こそユーウツ千万というべきであった。

道三は日本全体を征服するような過分な労力を好まなかった。もう年も老いた。彼は戦争よりもイヤガラセが好きだった。

去年の秋、織田の大軍をむかえて足腰たたぬほど叩きふせたから、そろそろ首をしめてやるころだと考えた。近江の国からその必要もなさそうな軍兵を大仰に借りうけた。

美濃のうちでも大垣だけは織田の支族が立てこもっていた。まず手始めにそれを攻め亡ぼして、という道三のモッタイぶった準備が、十一月のはじめから、間者たちによって頻りに尾張へ報告されていた。

去年の大敗北以来、信秀は再びオール織田軍を編成するだけの実力が恢復されていなかった。大仰な美濃の戦備に、どのように対処するツモリであろうか。

すると突如として十一月十七日の出撃である。信長にすら予告なく、手勢だけ率いての思いたっての出撃だ。

オール織田の大編成と周到な準備を立ててすらも去年のあの有様ではないか。まるで誘いの火にとびこむ虫のようなものだ。

「父上の骨を拾って帰るか」

信長は高らかな感動をこめて呟いた。すると馬を並べて闇路を進んでいる平手はカラカラと笑った。

「大殿は山城どのに劣らぬ大武辺者ですわ」

山城に劣らぬ——と彼は云う。平手にとっても、敵の重さ

がこたえているのだ。その怪物の重量が、信長の肌に冷めたくふれるように感じられた。

翌日、信長は父を追うて木曾川、飛騨川を渡り、竹が鼻に来てみると、町は焼き払われて一望の焼野原。父の軍兵が通り魔のように踏みにじって過ぎた跡であった。

父はアカナベ口へ向った由。その方角には諸所に火の手があがっていた。その奮戦が思いやられる。父の使者が信長を迎えて、いったん大垣の城に入り命令を待て、とのことであった。

城外の館にノンビリしていた道三は、信秀の思いがけない出撃の報に、ビックリ仰天、城内へ逃げこもったという。

その翌日も、信秀は当るを幸い火を放ち、美濃の村々を魔風のように荒れ狂っていた。その速力と不測の出没に、道三は貝殻のフタをとじて身動きもしなかった。

父の働きに満足して、信長は思わず政秀に云った。

「シラガ首の古マムシめが仰天して山の城へ逃げこんだそうだな」

政秀はうなずく代りに、睨みつけた。

「そんな話が小犬なぞにはあるそうですな。縁の下に穴をはり半日ふるえているそうです。小犬はな」

信長は興さめて苦笑した。道三ともあろう怪物が、仰天して半日ふるえているはずはない。去年大敗北を喫したのも、味方が勝ち誇っている直後であった。信長が、いま怖れているのも、そのことだ。

しかし、一時のことにしても、道三が仰天した貝のように殻の中にとじこもってフタをしめたのは争えない。精強の美濃衆に四囲の守りをかため、近江から援軍をよんで、特別の戦備をととのえていて、これである。

去年の秋には、特別の戦備をととのえていたのは織田方だ。そして格別の用心があるわけではない美濃へ攻めこんだのだ。その去年はムザンの敗北に終り、今年は一応アベコベの戦果である。

——敵の不意をついたからだ。

人々はそう語った。同じことだが、信長の考え方は違っていた。

——その速力が間者をだしぬいたからだ。

道三も信秀も間者を使う名人だった。否、たぶんあらゆる大将がそれぞれ間者を使う名人と見なければならぬ。戦争に勝つには、まず敵の間者に勝たなければならない。それが少年信長の考えであった。

父は敵の間者に勝ったのだ。しかし、長居をすれば、その結果は云うまでもなく明瞭だ。小さな勝利に誇るバカ。

その翌日、信秀はようやく大垣城に現れた。泥まみれの兵隊

たちは手づかみに腹をみたして、夜を待たずに眠りこけた。

信秀だけは眠るヒマがなかった。尾張から注進が来たからである。留守の間に、清洲衆が古渡(フルワタリ)城を占領したのだ。古渡は信秀の本城だ。清洲衆とは織田の本家の郎党であった。

尾張を出た時と同じように、信秀はその夜のうちに尾張へ戻った。

「キサマは那古野(ナゴヤ)の城へ戻れ。オレの加勢に来るまでのことはない」

父は信長にこういって、途中で別れた。僥倖にもこの男から死神が離れたらしいと信長は思った。天の助け。逃げるときを得たのである。一目散にひた走れ。逃げる時を逃すな。強いバカ。父の強さが次第に信長の疑惑となった。要心深い美濃の古マムシが気にかかるのだ。

織田家は守護職斯波氏の家老であった。主家が衰えたので、織田伊勢守が尾張の上四郡を支配し、織田大和守が下四郡を支配した。川を距てて上下の郡境の清洲城に斯波義統(シバヨシムネ)を置き、ここは同時に大和守の居城でもあった。

大和守に三人の奉行があった。織田因幡守、織田藤左衛門、織田信秀である。

信秀は織田氏の末の支族であるが、実力によって次第に織田氏の頭目となった。勝幡(ショバタ)の城から那古野に移って本拠とし、ついで熱田にちかい古渡に築城して、那古野城を少年信長に与えた。

信秀の最大の武功は小豆坂(アズキザカ)で今川義元の大軍を破ったことだが、真に尾張一國の頭目たるの威勢を示すことができたのは、オール織田とも云うべき大軍を編成して稲葉城下へ出撃した去年の秋であった。

その結果は大敗北に終り、信秀にとっては元来の主家たる織田大和守も戦死した。清洲衆とはその郎党である。大和守の養子彦五郎信友が後をついで清洲衆を支配し、また同じ清洲の城内に細々と命脈を保つ武衛様(ブエサマ)（斯波義統）とその臣下をも支配下におさめていた。

去年の秋の惨敗は信秀の威勢に大きな傷を与えたが、その最初の、そして最大の現れがこのたびの清洲衆の反逆であった。去年の秋には総大将が戦死するほどの協力を示してくれたのに、一年後の今では、同じ美濃への出撃の留守に信秀の本拠を荒したのだ。

信秀が戻ってみると、清洲衆は古渡の城下を焼き払って退散したあとだった。寄手の大将は坂井大膳、坂井甚助、河尻與一の三人の家老であったという。彼らは宗家の支柱たる古ツワモノだ。しかも宗家の主筋たる武衛様をも擁し、多くの織田族に火を放ける力ともなりかねない。

平手政秀は信長をうっちゃらかして古渡へ信秀を追った。

信長の教育を一任されている彼は、また織田家の興廃を肩に負わされているように感じていた。寝てもさめても、その責任が忘れられない政秀であった。

「昔の家柄を誇る者はとかくムホンしがちなものです。鬼の留守に火をつけて逃げるだけの才覚ならば、屁をたれて逃げるようなものですが、その無力こそ同情すべきことでもあります。清洲衆の顔を立ててやるぐらいのお気持が国を保つ人の襟度でありましょう」

政秀の進言をうけた信秀は、こだわらなかった。美濃や駿河の大敵にはさまれながら同族と事を構える愚は分りきったことだ。

家来たちは美濃の戦果に酔っている。留守に来て火を放けた清洲衆は、戻ってみれば逃げたあと。戦わずして勝ったと心得、美濃以来の味方の威勢に酔っている。家来たちがこの気分なら、事を好む必要はなかった。

「キサマこの扱いに良策があるか」

「策と申してはございませんが、双方の顔を立てるだけのことです」

「よかろう。思うように、やるがよい」

と、政秀に一任した。

ところが、政秀が折らでもの膝を屈して、円満和解を申しでてみると、これが容易でないことが分ったのである。

清洲の筆頭家老の坂井大膳は敵の弱味を握れば骨までシャブる高利貸のような陰鬱な実行力をもっていた。

「清洲の織田が古渡の町に火をかけたのを謝罪せよと仰有るのか。織田信秀とは何者だね。当家の奉行の一人にすぎないではないか。下四郡は当家支配の土地だ。誰に許しをうけて古渡に城を築いたのか。当家は尾張の守護代だよ。領内のことは焼いても毀しても意のままであろう。それとも、信秀が当家に代って、尾張の守護職をうけたと仰有るのか」

昨秋の敗北以来、信秀の威令が織田諸家を動かす力は失われている。

信秀が手勢を率いて美濃に働き、多少の戦果をあげてきたと云っても、敵の本拠を遠く離れた村々に火をかけてきただけのことではないか。その手にだまされて信秀を見直す織田一族が今ごろある筈はない。美濃の本拠に肉薄して真に決戦を挑む力がないことは、去年の例で分りすぎている。

「美濃の畑を荒してきて威勢を見せるのも子供だましには利くかも知れぬが、山城入道を怒らせただけ損ではないかね。山城が尾張へ攻めこめば、当家が道案内に立たぬでもない。一足先きにと信秀が清洲へ押し寄せれば、大方山城入道を早めに呼びこむことになろう」

大膳はシワの深い陰気な顔に露骨に不キゲンを見せつけ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com